

# ベルクソンの持続理論の検討

— 創造性の理論をめざして —

新 堂 粧 子

An Examination of Bergson's Theory of "Durée":  
Towards a Theory of Creativity

SHINDO Shoko

は じ め に

われわれは独創的で卓越した芸術作品や宗教的实践や科学的業績を前にすると、人間の持つ創造的能力に心をうたれる。どのようにしてこのような営みが達成できたのだろうか。しかし独創性の点でわれわれの心をうつのは歴史に名をとどめた天才たちの営みだけではない。われわれの周辺に起こっている一見日常的な営みの中にも、われわれは独創性を見出すことができる。たとえば教師が生徒の隠れた能力を発見し、その教師に触発された生徒が新しい道を歩み始めるとき、われわれはそこに教師の独創的な営みを見るが、またそれとともに生徒の新しい一歩の中にも彼自身の独創性を見ないわけにはいかない。われわれは独創性を十分に定義することができなくても、何が独創的かを直観的に知っている。もし定義が必要とあれば、われわれは次のように答えるだろう。独創性とは既知の条件ないし要因の組み合わせからはその出現を説明しえない何かの突然姿を現す、そういう営みである、と。この定義はもちろん十分なものとは言えない。しかしいちおうこの定義から出発しても大きな間違いはなさそうである。問題はその定義にあるよりもむしろ創造的な営みがどのようにして出現するかメカニズムにある。この点についてはわれわれはまだほとんど闇の中にいる。極端な言い方をすれば、どうして無からの創造が可能なのか。

私はかねてから、この創造のメカニズムについて関心をいだいてきた。それを知ることを通して、創造的な営みの定義も、いっそう明確なものになるであろうから、そのメカニズムを知ることが問題である、と考えてきた。しかしそれを知るためには、まず創造性の源泉をどこに見出せばよいかの問いに答える必要がある。そこで私はさしあたってアンリ・ベルクソンの思想の理解をめざすことにした。彼は創造性の源泉を奥深いところまで探求した思想家として知られているからだ。以下では、主として彼の主要4著作——『意識に直接与えられたものについての試論』（邦訳題名『時間と自由』1889、以下『試論』と略称）、『物質と記憶』（1896、以下『記憶』）、『創造的進化』（1907、以下『進化』）、『道徳と宗教の二源泉』（1932、以下『二源泉』）——を検討し、彼の持続理論を通して探求されている人間の創造性の源泉を見極めていきたいと思う。

## 1 「試論」——空間と持続

第1著作においてベルクソンは、常識が犯している錯誤を「意識に直接与えられたもの」へ帰することによって明みに出す方法を提示した。その錯誤とは、強さを持つものと広がりを持つものとの混同、すなわち質と量との混同である。われわれは「質的な進行」を量的な言葉で表現してしまう。たとえば、深い喜びや悲しみ、情念、美的情動といったようなある種の心の状態は、純粹に質的なものである。にもかかわらず、われわれはこれらの強さの差異を言い表す場合、「より大きい」とか「より小さい」という程度の差異を表す言葉を用いている。われわれの内部で経験される心の色合い(質)は、それを引き起こした外的原因やあるいはその結果の量に置きかえられてしまうのだ。

上に挙げた心的状態のように、たえず変化し区切られることのない(正確に言えば、区切られると変質する)連なりを、ベルクソンは持続と呼んだ。これに対して、大小(広がり)を持つものは空間である。空間は質を欠く(等質的である)から、いくらでも分割することができる。常識がためらいもなく犯していることは、持続の内部に(あるいはその背後を仮定して)空間を導入し入れることであり、それは持続の本性を損なうことにはかならない。持続が展開される場としての空間を考えないこと、持続の観念と空間の観念とを峻別すること、これが『試論』におけるベルクソンの最も基本的な主張である。

言語化(空間化)されえない持続の性質をベルクソンはよく音楽のメタファーを使って説明する。ある音楽を想い起こすとき、われわれはメロディーを構成するもろもろの音を、いわばいっしょに溶け合ったものとして経験するだろう。それぞれの音は相互浸透し、現在のうちに有機的に組織化されながら流れていく。一つ一つの音を全体から切り離してそれらを数を数えるようにつなげていくことは、われわれの思考習慣には親しいものであるが、それではある楽曲に身を浸しているときの体験を得ることはできない。

あるいはまた、私の隣りで時計の鐘が時を報じているとしよう。1番目、2番目、3番目の音は等間隔に同じ音で鳴る。しかし私は三つの音をそれぞれ違ったふうに聞けよう。それは前の音の記憶が次の音に重なってくるからだ。私の意識と無関係な時計の運動は等質的であるとしても、私の意識が直接とらえるものは、私の持続に満たされた質的な変化なのである。

われわれの自我に関しては、持続に身を置きやすい深い自我と、空間に身を置きやすい表層の自我との対比が考えられる。社会ではいろいろの観念や感情が区分され並置されているので、表層の自我はそれに応じて、自らをも分割しながら状況に対処している。Aという場面ではaという私、Bという場面ではbという私、といった具合にである。これに対し自我の深い層では、いろいろの観念や感情が緊密に浸透し合って動いている。深い自我は無限に流れる一つの力であって、これを分割して空間内に繰り広げようとするれば、ただちに変質をこうむってしまう。激しい愛情、深い憂愁は心を浸す。感情そのものは生きていてつねに発展し、そしてついにある決意へとわれわれを導くだろう。このような深い自我から出てくる決定は、複雑な心的過程を経てふいに現れる。ではこの決定の動機は何か。表層の自我は、あれこれの感情一つ一つをその要因として数えあげるだろうが、先ほどの音楽の例のように、それらを総合したところでこの決定の本質には至らない。すなわちこの決定は人格全体から湧き出たものであるとしか言えないのである。

ベルクソンは、このような決定の中に人間の自由を見る。彼の自由についての考え方は、いくつかの選択の可能性を自由と解する主意主義を批判する。ある選択がなされた後で（あるいはなされる前に）別の選択もできた（あるいはできる）だろうと考えるとき、われわれは現在の外に身を置いている。しかし現在の行為はつねに内的な心理の必然として推し進められているのだ。われわれが自由や不自由を感じるのは、行為（現在）においてのみであろう。自由を求めるならば、われわれは自己の内部に立ち戻り、人格の全体より行為を発すればよい。自由に行為することは自己を取り戻すこと、純粋な持続の中にわが身を置き直すことである。

『試論』におけるベルクソンは、持続と空間を二元論的に設定した。持続はわれわれの存在の深みに流れるもの、生命の流れであり、そこに自由という価値が見出される。一方、空間はその流れをせき止めるものか、あるいはせいぜい無関係なものとして、すなわち生命に対する物質として、社会あるいは存在の表層に結びつけられた。しかし、表層の自我なしの深い自我はない。両者はどこでつながるのだろうか。持続＝精神（自由）、空間＝物質という対立を際立たせた『試論』では、両者の接点（混交ではない）についての考察にまでは至らなかったと言える。それは、純粋持続を常識の混合物から取り出すことこそが、この第1著作のもくろみであったからだ。

## 2 『記憶』—— 純粋知覚と純粋記憶

第2主著『記憶』において、空間と持続の対照は純粋知覚と純粋記憶の対照に引き継がれていく。そしてここでは、副題「身体から精神への関係についての試論」が示しているように、知覚と記憶が結びつく行為の中心としての身体から考察を進めることによって、『試論』で残された問題——空間と持続の接点——の解明がなされることとなる。

実在論者は、われわれとは無関係に実在するものそれ自体（「事物」）の世界のみを認め、われわれがとらえる世界はその影にすぎないと主張する。他方、観念論者は、「事物」を認めず、われわれが思い浮かべ構成するもの（「表象」）があるのみだと主張する。しかし、ベルクソンによれば、これらはどちらも行きすぎた主張である。ベルクソンは、われわれの意識が「在る」と認めているもの＝イマージュ（「表象」以上であり「事物」以下のもの）を前提とした。それによると宇宙はイマージュの集合体である。その宇宙にあって特別のイマージュである私の身体は、これを取り囲むすべてのイマージュを行為に向けて規定し選択する。このとき生まれるものが知覚である。したがって知覚は、権利上は宇宙という全体のイマージュであるはずで、無際限なものである。しかし、事実上はそのうちの身体に委ねられている不確定の部分を出させるだけに制限されている。言いかえれば、知覚は広がりを持ち、後続する行為の幅を決定するというものであるから、それは空間を処理するものだと言える。

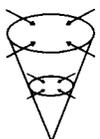
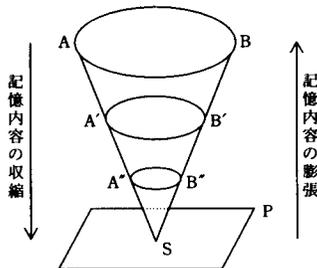
これに対して記憶は持続である。記憶とは、続いてくる瞬間においてつねに先立つ瞬間が後にくる瞬間に残す記憶内容（記憶内容としての記憶）であり、あるいはまた、それぞれの瞬間の未来に向かっての集約（集約としての記憶）であるからだ<sup>1)</sup>。知覚がわれわれを物質の中に置き入れるのに対し、記憶はわれわれを精神そのものの内へ投入する。

物質と記憶、純粋な知覚と純粋な記憶内容、現在と過去とのあいだには、性質の差異がある。

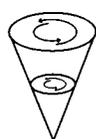
一瞬のうちに過去へ追いやられ、たえず前進している現在は、存在せずして活動しているのに対して、過去は活動せず、物質的には放棄されたものであるが、言葉の完全な意味において存在している。現在は〈在った〉のであり、過去は永遠につねに〈在る〉と言わなくてはならない。これが現在と過去の質的な差異である<sup>2)</sup>。記憶がいっさい介入しない純粋な知覚は、現在に閉じこもり、ひたすら外界の対象に適合する知覚であり、一方、純粋な記憶内容は役に立たない夢想されるだけのもの（存在するだけの過去）である。ただし、純粋知覚と純粋記憶は極限概念であって、これらの極限が現れ出るとは実際にはありえない。つねに行為する者としてのわれわれにおいては、無力な純粋記憶は現在の感覚へと物質化してそこから力を借り（記憶心像〔＝生まれかけの知覚〕の出現）、純粋知覚は記憶を引き寄せて受肉化する（記憶心像との癒着）。さらにそれが現在の感覚－運動機構の活動に収斂するとき、行為が成り立つのである。

私の記憶の全体と現在との力動を円錐体SABによって表してみよう。底面ABは、刻一刻と前進する現在の瞬間から最も遠くに位置する記憶内容の層で、行為として現実化されにくい。A'B', A''B''と記憶内容がS（Sommet 頂点）に向かって収縮するにしたがい、そこで生じる行為はより自動的なものに近づく。そして、Sは知覚と記憶が1点で重なる極としての私の現在であり、前進する無数の現在のイメージ（平面P）にたえず接触している。つまり、この無数のイメージから作用を受け、それにただ反作用するだけの身体イメージがSに集中しているわけだ。われわれの精神は、頂点Sと底面ABの2極限のあいだをたえず動き、中間のもろもろの切断面によって表される位置を次から次へと選びとっていく。このとき記憶内容は、全体的に（どの部分も隠されることはあっても削除されることはなく）、収縮あるいは膨張する<sup>3)</sup>。

【試論】においては、自動的な行為（物質性、空間性）から離れて純粋持続へ向かう方向に価値が置かれていたが、【記憶】においては、身体（物質）への注意の集中が生きていくうえで不可欠とされ、精神の正常なはたらきとして記憶内容の収縮という側面が強調されている。生きていく力を持つためにはどこかで現実に触れることが必要である。さもなければ人間は内閉の果てに、もはや何も外面化しなくなり、いわば不現在の生を生きることになるだろう。ベルクソン哲学が、物質を排除しない「新しい唯心論」<sup>4)</sup>と言われる理由がここにある。



〔並進運動〕

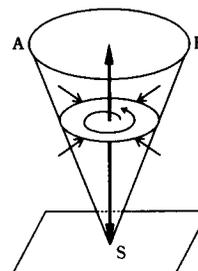


〔自転運動〕

円錐体の円AB, A'B', A''B''は潜在する記憶内容の固有のレベルであるが、各レベルにおいてそれが現実化するのは、二つの同時的運動で記憶が現実の呼びかけに応じるからである。一つは、記憶がそのレベルの中心に向かって全面的に進んでいく並進運動であり、もう一つは、そのときの状況にいちばん役に立つ記憶内容の側面を差し向けようと自ら回転する運動である。このあたりのベルクソンの記述はかなり難解である。行為に向けてのすべての力は、たがいに影響し合いながら、まったく同時的にはたらいっているのだから本質的に異なる基本的な力を抽出していく作業は、きわめて困難なのである。

記憶内容の現実化に向けて展開される運動を整理しておこ

う。精神の最も強調されるべき運動は、純粹記憶を表す底面 AB の中心と純粹知覚を表す頂点 S とのあいだの垂直軸にそった運動である。この運動によって、われわれの生が持続の流れにのせられる。そしてこの持続する生が、それぞれの生のレベルで行為へと引き寄せられ組織化されることが、水平面の運動（並進と自転）によって可能となる。以上の心的運動を基盤にして行為が導かれるが、実際に行為が生じるためにはさらに身体の運動がそれに加わらねばならない。



身体は受けた刺激と遂行される運動との出会う場所である。そこでは数多の感覚－運動神経がしっかりと結合し、精確に交錯している。この感覚－運動的諸関係が攪乱されると（身体の力動的障害）、記憶と知覚は現実との接触を失う（たとえば、精神病患者の非現実感）。それによって精神的平衡（先の心的運動の平衡）も破壊を来し、精神錯乱へと向かうであろう。これとは別に、ある感覚－運動的結合が他から切り離されるかのように、感覚－運動的基体（身体）が衰弱する場合もある（身体の機械的障害）。この場合、心的運動自体の平衡は破壊されないが、心的運動と身体との結びつきが一部失われるだろう（人格分裂）。いずれにせよ、これらの病態の原因は身体機能の障害にあるのであって、記憶内容が冒されたり傷ついたりするのではないという点を、ベルクソンは強調している。

ところで先に、『試論』で提示された空間と持続の対照は、『記憶』において知覚と記憶の対照に引き継がれたと述べたが、ここでベルクソンは、知覚と記憶の差異は記憶内容の収縮と膨張の差異であるという地点に到達している。記憶内容の収縮の極である物質界では、先行する瞬間は後にくる瞬間が現れるときにはほとんど消えてしまっている。すなわち、先行する瞬間が後にくる瞬間に残す記憶内容が収縮しきってしまい、各瞬間が未来に向かってほとんど集約されない世界、言いかえれば持続が最も弛緩している世界、これが物質の世界であると考えられる。こうして、『試論』で空間に帰属された物質は、いまや持続の列に引き入れられた。

物質といえどもいくばくかの持続を分有している。しかしそう考えると、非常に弛緩した持続から非常に緊張した持続に至るまで、さまざまな持続があるということになるのだろうか。持続は程度の差異を否定するし、数えられない（量を否定する）ものであったのではないか。この点に関しては、ベルクソンの他のテキストから次の文を引くことで答えが得られる。「われわれが川岸に坐っているとき、水の流れ、小舟の動きか鳥の飛翔、われわれの深い生のたえまないささやきは、われわれの意志によって、三つの異なったものかあるいは一つのものである」<sup>9)</sup>（『持続と同時性』）。水の流れ、鳥の飛翔、私の生のささやきは、三つの流れをつくっている。それら持続のリズムの差異は、程度の差異というよりは質的な差異であろう。さらに、質的な差異を持ったこの三つの流れは、その流れの条件である唯一の同じ時間（持続）の中で交流するのである。逆説のように聞こえるが、持続はきわめて特殊な分割のタイプを持った不可分性であり、同時に継起する流れだと言える<sup>9)</sup>。

このような持続の理論によって（物質にも持続を認めることによって）、われわれは物質と精神の二元論を超え出る。では空間とは何か。空間は、物質さえもたどりつくことのない持続の弛緩の究極（持続のゼロ地点）に見出されるだろう。空間はなにか実体的な広がりではないのであ

る。それは、われわれが物質にはたらきかけるときにより適切にそれを支配することができるよう、われわれの知性が主体と対象とのあいだに導き入れる空虚な行為図式にはかならない。持続の哲学にとって、否定すべきは物質ではなく、われわれを持続から切り離す図式的空間のほうである。[のちにベルクソンは、たんなる図式ではない物質空間を認めている<sup>7)</sup>。宇宙は持続しているが、そこから物質のみを切りとって物質の体系をつくりあげる科学にとっては、物質空間は実在のものである。知性はまさにこの物質空間をかたどって図式的空間を獲得したのである。]

### 3 「進化」——知性と本能

質的に異なった多様な持続が潜在的に共存しており、そしてそれらを包括しかつそれら自身でもある唯一の持続が全体的に進行している。『記憶』において人間の心理的生命の説明に用いられたこの考え方は、それを超えて宇宙的生命にまで広げられる。第3主著『進化』は、恐るべき一つの記憶であるかのような生命の進行についての考察へと進むのである。

そこでは、円錐体の図をふたたび用いることができる。円錐体の全体によって表されていた記憶の全体（すべてのレベルの記憶内容と、垂直および水平方向の記憶作用の全部）は、宇宙的生命そのものに置きかえられ、記憶内容のレベルを表した各断面の円は、生物の類または種に対応させられる。そして、生命の起爆力とともに出現した最初の生物的生命が円錐体の頂点に置かれる。そうするとこの円錐体は、生物の進化と各種の生命の共存を描く図となるだろう。

最初に出現した生物的生命は、その持続の性質（潜在的多重性）にしたがって扇形状に広がろうとする。この生命本来の傾向（爆発力）と、その前進途上で出会う物質の抵抗力とに導かれて、生命は進化の道をたどっていくのである。ここでは物質はたんなるじゃまものではない。それは、川の流れが小石や岩に当たりながらその水路を確定していくような様子にとえられる。物質は流れをはっきりとした線に分ける。この小分けの線は、流れの中にぼんやりとは描かれていたものの、物質がなかったら際立たなかっただろう。

生物の種は、この進化の運動の主流からはずれて運動を停止し、その場で旋回しているような、いわば現実化された持続である。さまざまな種が、それぞれの生命のレベルで旋回しながら共存している。それらすべての種に生命の根源力は伝えられており、また、それらが一体となって大いなる流れをつくっているのだ。人類は、物質を支配し利用する知性の力を際立たせることによって、進化の最も先にまで到達した。知性は、物そのものではなく物と物との関係を知り、それを形式化し一般化する能力である。知性は、物質に形を合わせてそれに適合するだけでなく、さらに歩を進めて、純粋な等質空間（等質時間も含む）というシェーマを獲得しているのだ。そして知性は、種（個体）の利害関係を超越し全宇宙をその支配下に置くところまで行こうとする。しかし、対象の上に等質空間を重ねる知性は、つねに対象の外側からそれをとらえるのであって、対象の内側に入り込むことはできない。

これに対して、進化の途上で知性がそれと分岐した本能は、物質（物と物との関係）にではなく、生命そのものに向かう。本能は、環境の中のもののうち自分に利害のある特定のものを、その内側から（持続のもとに）とらえるのだ。対象を知るといっても対象とともに生きられるこの本能は、誤ることなく的確に対象をつかむであろう。しかしその能力の範囲は限られている。

個体の行為の円を閉じて、その中で個体が自動的に動き続けることができるようにはたらくのが、本能である。本能を頂上にまで発達させた種は、膜翅類の昆虫だ。蜜蜂や蟻はおどろくほどよく統制され、種の旋回運動に組み込まれているのである。

生物進化は生命の意志の流れ（生命の躍動＝エラン・ヴィタール）に貫かれている。その意志は、生物的生命をたえず更新する創造の力であり、生命は物質のくだる坂をのぼろうと努力するのだ。人類はその坂をのぼりつめてきた種であるが、そのことを可能にした知性に頼りきっているかぎりは、生命の意志からはずれてしまうだろう。知性は本来自由な生命の力に杵をはめ、その力の革新性や創造の面を見逃してしまうのである。では、人類もまた種の旋回運動に閉じられてしまい、進化はここで止まるのであろうか。そうではない。生命の意志はさらに先へ行こうとするだろう。人類は知性以上の直観の力によって旋回運動を抜け出ると、ベルクソンは主張する。

本能と知性はもともと未分化であった。動物の進化とともに本能の周辺にただよっていた知性が輝きを増してきたわけだが、そのことによって本能が消えてなくなるということはない。人類の段階に至っても持続の多重性は生きているのだ。人類がさらに生命の躍動を推し進めるには、この本能の力を用いてふたたび持続の内に身を置かねばならない。しかしそれはもはや種（特定の持続）に釘づけにされている本能の方向に戻ることはない。個体を超えてもっと根源的な生命の持続を直接とらえることのできる力によって、それはなされるはずである。知性と本能との間隙から活性化されるこの能力こそが、ベルクソンによって直観と呼ばれたものである。

こうして直観は知性を超えるが、それは知性を否定しないということをつけ加えておこう。知性によって人類は進化の頂上に達したのであるから、これがなければ本能は直観へと飛躍しないであろう。直観は、持続に没入する本能の力を引き継ぎながら、また、知性と同様に種のサークルを破って宇宙全体に到達するのだ。この直観により、人類は物質にもいくばくかの持続を見、また他の生命とのあいだに共感による疎通を成り立たせる。そして、人類の生命は、そのような持続の多重性の中で果てしなく創造の続けられる地点へと導かれるのである。

『記憶』と『進化』におけるベルクソンは、物質や知性をたんに生命や直観と対立させて排除することはしない。この点で『試論』を超えて両著書はつながっている。さらに『進化』は『記憶』の円錐体のモチーフを転用している。ただし、そこで強調されたエラン・ヴィタールは、生命の起点からできるだけ遠くへと上昇していく方向を示すものだから、『記憶』の身体（物質）への集中（記憶内容の収縮）の向きとは逆である。エラン・ヴィタールの方向は、『試論』の持続への沈潜の方向に重なる。しかし、『試論』ではそれが生活からの逃避、放心として語られるのに対し、『進化』では、生命の努力、推進として取り上げられるのである。

#### 4 『二源泉』—— 閉じた道徳・宗教と開いた道徳・宗教

『進化』において示された方向（さらなる創造的飛躍）を人類はどのように実現していくのだろうか。それを描くために、ベルクソンは人類社会についての考察に進んだ。

蟻たちの自然的社会は種の保存本能によって固く結束されており、蟻たちは自分がなぜその本能の命令にしたがわねばならないかをけって問わない。彼らは本能に忠実に、ひたすら生きる

のみである。これに対して人間の知性は、本能からくる個々の命令に理由を与え、責務の体系すなわち道徳をつくりあげる。人間の社会は、この道徳が人びとを結びつけることでできあがっているものなのだ。ただし、人間においても、この道徳にしたがって社会的生活を営むようにと人びとを推進する力は、本能からくると言わねばならない。知性は、個々の責務に対してなぜそれにしたがわねばならないかを説明するのみで、責務一般、すなわちなぜわれわれはつねに自分の背後に責務の集塊を引きずらねばならないのかを教えるはくれないだろう。知性の弱い蟻たちもまた、それはただ責務であるからだ、としか言えないだろう。責務の底には生命の必然の力（本能）が透けて見える。この単純な事実を知性はとらえることができないし、本能は語ることはできない。

このような責務の体系を、ベルクソンは閉じた道徳と呼ぶ。なぜなら、それは結局は種の保存（自然の要求）に根ざしており、種を超えて広がることはないからである。したがって、閉じた道徳によってできる社会も、その社会の利益のみをめざして他を排除するから、閉じたものである（閉じた社会）。

社会の成員相互の関係を規制する道徳（閉じた道徳）から、さらに、共同体と個人を規制する宗教（閉じた宗教、静的宗教）に話を移してみよう。個体の意識が突出している人間においては、共同体と個体とのあいだに動揺が生じがちである。人間の知性は個体が全体のために支払う犠牲に疑いをいだくのであって、この利己心は共同体の解体をさえ招く危険なものである。これに対処するために宗教が利用される。共同体の成員だけを信者とする閉じた宗教は、儀礼などをつうじて成員を共同体に緊密に結びつけ、他の集団に対して壁をつくる。これによって外敵から身を守られる個体は、共同体の存続、強化を望むようになるだろう。こうして閉じた宗教は、共同体の利益と個体の利益を調整してくれるのだ。

さらに、閉じた宗教にはもう一つの重要な機能がある。それは、死の予見がもたらす不安や意気阻喪から人間を救い出す機能である。分析し一般化する知性の能力は、すべての生きものが死ぬことを知り、自分も必ず死ぬのだということを人間に確信させる。死の予見は、人間の活動力を衰えさせ、ひいては種の存続を困難にするだろう。ここで閉じた宗教のもう一つの機能が作用するのだ。それは、たとえば、肉体の死を超えて靈魂が存続するという信念など、多種多様な虚構を産み出し、それを人びとに信じさせる機能である。人びとはそれによってふたたび生きる勇気を取り戻すだろう。

以上のような閉じた宗教の二つの機能を、ベルクソンは仮構機能と名づけている。どちらも知性の破壊作用（知性の抵抗）に対する自然の防禦反応であり、種の旋回のうちに安定しようという人間の欲求を満たすものである（よって静的宗教とも言われる）。したがって、閉じた宗教を産み出す力もまた本能に由来する。ただし、仮構の能力は知性のものだから（抵抗への抵抗）、いわば知性的本能とでもいうものが、閉じた宗教をつくり出すのだと言えるだろう。

ところで、『進化』で示唆されたように、人類はこの閉じた社会の中で旋回し、種を保存することのみに甘んじてはいない。閉じた社会を突破していく開いた道徳や宗教（動的宗教）をもまた、人間はつくり出していくのである。それは、種に縛られた本能や、生命の内部に入り込むことのできない知性によってはなされえないだろう。開いた道徳や宗教のもととなるものは、生命の根源から湧き出る魂の深部のうねり（深い情動）である。このうねりが人間の意志や知性には

たらきかけ、躍動となり思想となるのだ。人間が生命の根源に向かうのは直観の力によってであった。直観がわれわれの深い情動をとらえ、それを進展させてくれるから、情動は創造的行為に結実しうるのである。直観にささえられ、意志や知性にはたらきかけるこの情動を、ベルクソンは知性以上のものと言う。

深い情動は、たとえば祖国や家族に対する愛（知性以下の情動）のように対象によって規定されたものではなく、万物に無限に拡がっていく一つの性質である。われわれは家族や国家を経て段階的に人類に到達するのではない。知性以上の情動は、人類よりもはるか遠くまで拡がるが、その過程においてたまたま人類という対象を見つけるだけである。人類を目的とすることなく人類をのりこえることによってわれわれは人類（開いた社会）に到達するのだ。閉じた社会は社会を維持するために抑圧力をもって人びとを動かすが、開いた社会は人びとの深い情動に直接介入して、そこから生まれる憧れや躍動の力とともに前進していく。深い情動の浸透力と吸引力とを表す例としてベルクソンが挙げるのは、崇高な音楽の与える感動である。「音楽が泣いているときは、全人類がいっしょに泣いている。全自然が泣いている。しかも、音楽がわれわれの内部へこの感情を移し入れると言っては正しくない。むしろ、ちょうど通りすがりの人が、街角のダンスへ否応なく引き入れられるときにも似て、音楽がわれわれを感情の内部へと引き込むのである」<sup>9)</sup>（『二源泉』）。この力は、圧力や圧迫といったものとはまったく違うものである。

開いた道徳とは、魂の全体を吸い込み、知性によって冷やされた魂をふたたび熱くするような愛や、バランスを保つ正義を超えた絶対的正義において示されているものであり、これは意志の天才によって体现される。意志の天才は、生の奏でるつねに新しい響きを聞き、自らそれを生きることによって、先の音楽のように他の人びとをその響きの内へ引き入れるのだ。したがって、閉じた道徳の命令が非人格的であればあるほど効力を発揮するのは反対に、開いた道徳は、それが特定の魅力ある人格によって体现されればされるほど人びとをひきつけるのである。

また、浸透する深い情動を通して人間が根源の生命の流れに入り込み、その創造的努力（神の性質）と部分的に合致することを説く真の神秘主義が、開いた宗教である。この宗教は、人間の前進運動への欲求を満たしてくれるから動的宗教とも呼ばれる。開いた宗教は、種の限界をとびこえエラン・ヴィタールを継続し延長する個性、すなわち偉大な神秘家によって実現される。卓越した直観力をそなえた偉大な神秘家のみが、根源の生命を生きることができるからだ。

意志の天才や神秘家たちは、生命への愛をたずさえてその創造的な躍動に身を投じる人たちである。彼らの躍動をベルクソンは愛の躍動（エラン・ダムール）と呼んだが、それはエラン・ヴィタールと別なものではない。エラン・ヴィタールが特別な個人を通してその創造的機能を発現する場合に、それをエラン・ダムールと呼ぶだけだ。彼らの愛の躍動は、閉じた社会を横切って、魂から魂へと、他の多数者に伝わっていく。われわれ人間の多くは、意志の天才や神秘家たちのように根源的生命を生きぬくことはできないにしても、自らの深い情動にこだまする彼らの呼びかけに魂を開くなら、この生命の流れに触れることはできるだろう。そしてそこにいつきでも身を置くとき、われわれにもまた、開かれたものへ、つまりいままでとは異なった方向へ目を向ける可能性が開かれるのである。

『記憶』『進化』で表明されてきた「物質を排除しない」という立場によれば、閉じた社会（物質的なもの）は、それを超える生命の意志にとって、たんなる対立物として否定されるもの

ではない。それは、開いたものへと向かう生命の意志の進む道を、よりはっきりと浮かび上がらせてくれるだろう。人類は自らの種の閉じた社会をつくりあげ、自然の命令（種の保存、これも生命の意志の一部ではある）を成就した。そしてそのことによって、種をのりこえ、さらに前進しようとするより深遠な生命の意志を実現する道のあることを、選ばれた人びとを通してわれわれに垣間見させてくれたのである。

## 5 持続と創造性

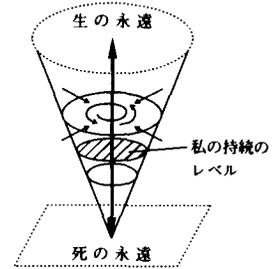
ベルクソンの哲学は、持続する生命の理論に貫かれている。彼が見極めた持続は、いわば宇宙にまで広がっており、潜在的に多重かつ唯一のものであった。この持続の全体は、そのあらゆるレベルでさまざまに現実化されるだろう。しかし各レベルの根底にあるものは同じ唯一の持続である。私というレベルにおいて生命の持続を実現している私は、私の内部に生命を感じることができ、それは私の外部へも流れ出ていく。一方、外部のあらゆるものもそれぞれの持続のレベルで存在しており、それらの持続と私の持続が共鳴し合うとき、私と外界は一つに融合する。われわれは、自己の内的生命を深く生きれば生きるほど外界の自然が生きて感じられてくることを知っている。また逆に、外界の自然に接することによって自己の生命が活気づけられるという経験を持ったこともあるだろう。溶け合う二つの倍音の底にある基音は、宇宙的生命全体の持続である。

自己の内部と外部とが両者の根底でつながっているという考えの妥当性は、たとえば、同年（1840年）生まれの二人の画家、オディロン・ルドンとクロード・モネとの比較によって興味深く示されるのではないだろうか。近代絵画の歴史の中で、象徴派と印象派にそれぞれ位置づけられる二人だが、両者は19世紀後半の絵画表現における二つの本質的傾向を徹底的に推し進めた。自己の内へ向かう志向と外へ向かう志向がそれである。ルドンは内部の夢に没入し、モネは外光を追いか求めた。ルドンの眼は画家の内面を見つめ、自己の発生の根源へ歩み入り、ついには自己を超えた「生命の宇宙」を獲得する。一方、モネはさまざまな外観の前に自己はできるだけ無垢の状態であらねばならないと思っていた。その眼はまったく透明なレンズであることがめざまされたのだ。モネは外界の移ろいゆく光や水面を刻々と描き続けたが、その究極において彼が見たものはある種の時間であった。それは均等で抽象的な時間ではなく、現象の移ろいが一瞬一瞬、画家の感性に迫ってくるような「野生の時間」である。ルドンの到達した「生命の宇宙」とモネの到達した「野生の時間」は同じものを言い当てているようだ。逆方向の歩みを進めた二人だが、彼らの晩年の作品がわれわれに与える調子は同一方向をめざすものであるように感じられる<sup>9)</sup>。

要するに、私の内部と外部は通底している。私は私の持続を生きることで、外界に溶け込んでいくことができる。自然との交歓のみならず、他者に共感したりあるいは芸術作品に感動するといったような経験もまた、持続の共鳴による自他の融合から引き起こされるものなのだ。ここからさらに創造性の問題を考えてみよう。上述のような私の持続のレベルにおける自他の融合はなにか創造への可能性を予感させるが、ここにとどまるなら、創造性はまだ眠らされたままだと言わねばならない。創造者は自己の持続を用いて他の持続を直観し、そのことによって自己の持続から脱出する。そして根源の持続に身を置き、そこから自他を超える新しい持続のレベル（根源

の持続に潜在するもの)を現実化していくのである。

ベルクソンの4著作を検討してきたわれわれには、この創造の過程は例の円錐体によって表されるだろうということが明らかである。『記憶』で人間個体の心理的生命の力動を解く図として提示された円錐体を、われわれはベルクソンとともにすでに、生物種の進化を描く図に転用した。それをさらに創造性(新しい持続の現実化)を説明する図として、ここでふたたび用いたいと思う。その場合、円錐体は生命的持続の全体を表し、私の持続のレベル(『記憶』における円錐体)



は一断面円に置きかえられる。最上位の点線円は、最も緊張した持続のレベルであり、そこではあらゆる生命が緊密に交錯したえず有機的運動を繰り返している。これは「生の永遠」の層と呼べるだろう<sup>10)</sup>。ただし、純粹記憶が極限概念であったように、実際にこの層がわれわれの前に現実化されることはありえない。反対に円錐体の頂点は、これもまた生きている(持続している)われわれには、純粹知覚と同様に直接とらえることはできないものであるが、それは最も弛緩した持続の極を表す。すなわちこれは物質性の極である。この頂点を含む点線の平面では持続は崩壊し、まったく同質な粉塵となった瞬間がバラバラに点在している。そこではもはや持続を持たない分子が無機的な振動を反復しているだけだろう。これは「死の永遠」である。[「生の永遠」「死の永遠」という表現は、論文「形而上学入門」においてベルクソンによって使われている<sup>11)</sup>。ただし、ベルクソンの言う「死の永遠」は、知性が対象を分析しそれをふたたび統合することによって得られる概念的世界を指すので、ここでの私の使い方とは若干異なる。しかし、両者とも「持続を持たない世界」を表している点で共通する。]

死の永遠と生の永遠とのあいだで、創造者は、自己の持続のレベルを上下に超えて新しい持続のレベルを出現させるのだ。『進化』と『二源泉』においてベルクソンは、生の永遠へと上昇する方向の創造性を強調しているが、これまで見てきた彼の持続の理論にしたがうならば、死の永遠へと下降する方向もまた、ある種の創造性であると言えるだろう。下降の方向はすでに『記憶』において重要視されていた。しかしそこでは個体の心理的生命の運動が問題にされたので、下降の力は身体(物質)への注意の力として解釈されていたのである。ここで私は、生命体の諸要素が有機的結合に向かう傾向あるいは力を意味する「エロス」という用語と、無機物への分解に向かう傾向あるいは力を意味する「タナトス」という用語を借りて、生の永遠に向かう創造を「エロスの創造」、死の永遠に向かう創造を「タナトスの創造」と名づけたと思う。これらの用語を使うことによって、われわれは創造性の実現を人間の欲動に関連づけて説明する方向へと導かれるだろう<sup>12)</sup>。ベルクソンの言うエラン・ヴィタールが、すなわち人間に内在して固有な形で現象する力が人間の欲動である。ベルクソンの生命の哲学はこの人間に固有な欲動を議論する地平にはないが、創造性に関する人間の研究には、この地平に立つパースペクティブが必要である。

また、それぞれの持続のレベルの断面において、持続が現実化される(創造が生じる)場合、創造者はそのレベルの持続の光を周囲に放射しながらさまざまな対象をその光のもとに照らすと同時に、この持続の根拠(創造者の内的生命)に向かってその光を凝集するという二つの運動をおこなっているだろう。この二つの運動は、『記憶』の円錐体において示された水平面の二つの

運動（自転、並進）から類推されるものである。創造者が対象に向かう志向を創造の遠心性、自己の内的生命に向かう志向を創造の求心性と呼ぼう。生の永遠への上昇度が高いエロスの創造ほど遠心性が強くなり（図では円錐体の断面円の拡大によって示される）、それに応じて求心性も強く作用しなければならないだろう。先に挙げたルドンとモネはともにエロスの傾向の強い創造者であるが、ルドンは求心的（ただし遠心性を内在する求心性）であり、モネは遠心的（ただし求心性を内在する遠心性）であったと言える。他方、精神の物質性を追求するタナトスの創造は、本来、求心的であり、その遠心性は弱い。しかし、その極限において、精神はまったくの物質に還元され等質空間に解消されてしまうから、ここに至っては、創造の求心性は遠心性と別のものではなくなる。

エロスの創造は生の輝かしい光を放出してやまず、タナトスの創造は生の物質的側面である暗い闇を追求する。ベルクソンもそうであったように、われわれはふつう創造性といえばエロスの創造を想定しやすいが、タナトスの創造の例としては、たとえば文学ではマルキ・ド・サド、フランツ・カフカ、サミュエル・ベケットらの作品を挙げることができるだろう。ただしここで付言すべきは、エロスの創造とタナトスの創造とは二者択一的に対立するものではないということである。両者ともに根源的生命の同じ跳躍運動によるものなのである。したがって、ここに挙げたタナトスの作家といえどもその作品の中にエロスの側面が現れ出ることがあるし、逆にエロスの作家もまたタナトス的世界を描きうるだろう。さらに言えば、生の永遠と死の永遠は同じ宇宙の両面である。創造者の個性によって、宇宙のエロスの側面によりひかれやすいかタナトスの側面によりひかれやすいかの違いが出てくるわけだが、いずれにしても彼らは自己を超えた宇宙に突き進んでいくのである。彼らは、創造するたびごとに宇宙的持続のいくぶんかを実現するだろう。その創造の一つ一つは、彼ら自身はもちろんのこと、それを受けとめる他の人間をも深く変化させる。しかしそれぞれの創造の後、享受者の一時的に開かれた円環はふたたび閉じられ、それらの創造は人びとのもとの生の持続へと吸収され沈黙していくにとどまるであろう。したがって創造者は立ち止まってははいない。宇宙的持続に身を置きつねにその新たな側面を現前させ続ける者、これが創造者なのである。

## おわりに

本論では、ベルクソンの持続の理論の読解と、創造性論へのその応用をめざしてきた。最後の創造性に関する私の考察はその端緒を示したにすぎない。今後の方向としては、エロスあるいはタナトスという人間の欲動が創造的営為へと導かれるメカニズム（たとえば昇華）の問題や、人間の破壊性と創造性とはどのような関係にあるのかといった問題について、さらに考えていきたいと思っている。これらの点に関しては、ベルクソンだけに依拠してそれを展開することはおそらく困難であろう。というのは、先にも少し触れておいたが、ベルクソンにおいては、たとえば「生の永遠」と「死の永遠」という形でエロスとタナトスの志向する究極の世界が語られているけれども、それらが個々の人間の中でわれわれを動かしているメカニズムについては、観照的立場に立ってしか述べられていないからだ。言いかえれば、ベルクソンは〈存在〉（生命の持続）の層を語るだけで、〈存在〉によって動かされている〈存在者〉（個々の人間）相互の関係を

語らない。そのため、よく言われているように、ベルクソンの哲学においては他者や悪の問題が登場しないのである。〈存在〉の形而上学に関してわれわれはベルクソンから多くを学ぶことができるが、〈存在者〉の人間学に関しては、他の諸理論を取り入れながら考察を重ねていかなければならない。しかしながらわれわれは、ベルクソンの独創的な生命の哲学によって、人間学の出発点にまでは導かれたのだと言えるだろう。

註

- 1) G. ドゥルーズ (宇波彰訳)『ベルクソンの哲学』法政大学出版局, 1974年, 51-52頁, 参照。以下の論述においては、本書からいくつかの示唆を得ている。
- 2) 同上書, 55-56頁, 参照。
- 3) 湯浅博雄によれば、さまざまな記憶内容(切断面)の想起は想起の反復であると言えるが、その反復は物質の場合とは異なり、同じ要素が繰り返されるのではない。「心的な生」においてはそれらの要素あるいはそれらの組み合わせのどれが浮かび上がってくるかは、想起のたびごとに異なる。こうして想起により人は「多様な生」を生き直すことになる。『反復論序説』未来社, 1996年, 156, 161頁, 参照。
- 4) G. プロを引用する J.-L. ヴィエイヤール=バロン (上村博訳)『ベルクソン』白水社文庫クセジュ, 1993年, 53頁。
- 5) H. Bergson, *Durée et simultanéité*, 2<sup>e</sup> édit, augmentée, Félix Alcan, 1923, p. 67. 花田圭介・加藤精司訳『持続と同時性』(ベルグソン全集3)白水社, 1993年, 210頁, 訳文をやや変更。
- 6) ドゥルーズ, 前掲書, 87-88頁, 参照。
- 7) H. Bergson, Introduction (Première partie) à *La pensée et le mouvant*, *Œuvres*, P. U. F., 1970, p. 1261. 矢内原伊作訳『思想と動くもの』「緒論 I」(ベルグソン全集7)白水社, 1993年, 20頁, 参照。
- 8) H. Bergson, *Les deux sources de la morale et de la religion*, *Œuvres*, p. 1008. 森口美都男訳『道徳と宗教の二つの源泉』(『世界の名著』53)中央公論社, 1969年, 252頁。
- 9) 峯村敏明「シリーズ・循環・メビウスの帯」『モネ』新潮美術文庫26, 1974年; 粟津則雄「夢と神話」『ルドン』新潮美術文庫36, 1975年, 参照。
- 10) 各断面円は『記憶』における追想の各水平面(plan)に相当する。『二源泉』においても「自然のplan」という表現があるが(*Deux sources*, *Œuvres*, p. 1022), これは「生の永遠」にまでは至らない断面円の一つを指している。すべての現行の日本語訳ではこれが「自然の計画」と訳されているが、これはドゥルーズの読解にしたがって「自然の平面」と訳すべきであろう。ドゥルーズ, 前掲書, 原注(2), 126頁, 参照。
- 11) H. Bergson, Introduction à la métaphysique dans *La pensée et le mouvant*, *Œuvres*, p. 1419. 坂田徳男訳「形而上学入門」(『世界の名著』53)中央公論社, 1969年, 92-94頁, 参照。
- 12) 作田啓一「エロスとタナトス — あるいはマゾッホとサド」『三次元の間 — 生成の思想を語る』行路社, 1995年; 同「文学・芸術におけるエロスとタナトス」『文学と芸術の社会学』(岩波講座現代社会学8)岩波書店, 1996年, 参照。

(博士後期課程2回生, 臨床教育人間学講座)